



俺はスマホの画面を必死でめくりまくる。人差し指も手首も腱鞘炎になりそうだ。ネットサーフィンどころか、ネットの中で力尽きて溺れそうだ。それもこれも、あの事件のことが気がかりだからだ。

幸いなことに、今のところ、あの事件については何も載っていない。つまり、まだ、見つかっていないのだ。とりあえず、ほっとする。

安心すると、他のことに関心が向く。そうすると、指などの痛みを忘れて何か面白いネタはないかとネットを探す。我ながら勝手なもんだ。

なんだ、これは。俺の目に止まったのは一つの公募だった。「あなたの秘密を教えてください。最優秀賞には賞金一億円！」

秘密は秘密だからこそ秘密であって、それが公になれば、秘密じゃなくなるじゃないか。矛盾に満ちた公募だ。誰がこんな公募をしているんだ。

主催者は「全国秘密愛好会」。住所はない。メールアドレスが掲載されているだけだ。それも、zenkoku@himitu.co.jpというふざけたアドレス。

そんな変な愛好会があったのか。怪しい。こんな募集に応募する奴がいるのか。だが、一億円という金額は非常に魅力的だ。

俺の逃亡生活も半年が過ぎた。貯金もかなり底をついてきた。まだ、一か月ぐらいはもつだろうが、そろそろ金を儲けなければならない。車上生活にも疲れてきた。でも、仕事に就けば、ひよんなことから、俺の秘密がばれてしまうおそれがある。

今のところは事件が発覚していないけれど、用心に越したことはない。でも、一億円は魅力だ。それがあれば、一生、逃亡生活を送り続けることができる。

これだけでは判断がつかない。他にも情報が欲しい。俺はネットで、「全国秘密愛好家」を検索した。出てきたの、「あなたの秘密を教えてください。最優秀賞には賞金一億円！」とメールアドレスzenkoku@himitu.co.jpだけだった。

これじゃあ、さっきと同じだ。俺の秘密は、俺の人生がかかっている。いくら一億円を貰っても、警察に捕まってしまうえばその金は使えない。

それに応募したからと言って、必ずしも一億円が貰えるわけではない。そうなれば、秘密は公開して、俺も公開されて警察に捕まるという、踏んだりけつたりの結果となる。そんな危ない橋は渡れない。俺は応募をあきらめた。

翌日、再度、ネットサーフィンをする。今日もあの事件については何も触れられていない。よかった。だが、昨日の秘密の公募が気になった。

ホームページを開く。昨日は気がつかなかったが、応募件数が掲載されている。既に千件以上だ。世の中には変わった奴がいるものだ。秘密の癖に秘密を暴露するために、応募するなんて。やはり一億円が魅力なのか。一体、どんな秘密を応募しているのだろう。

主催者側が例示を出している。何々、「お前の母さん、でべそ」、だって。子どもの喧嘩じゃないんだからな。他にはないのか。

「キリンの首が長いのは、高い木の葉を食べるためです」これは秘密でもなんでもないだろう。事実だろう。他にはないのか。

「僕のお年玉は十万円です。小学生一年生」まあ、小学生一年生ならかなり多い方かもしれないが、大した秘密じゃない。それがどうしただ。

こんな例示を出すから、みんな、一億円を狙って応募するのだろう。俺も応募したくなる。この程度の秘密ならば、俺の秘密の方がもっと秘密だ。何しろ、あの事件のことだからな。何？締め切りは今日までか。

自分が捕まる恐れよりも、一億円が欲しい気持ちと事件を自慢したい気持ちが大幅に上回り、俺は全国秘密愛好会に俺の秘密をメールで送った。

ここは秘密情報局。

「課長。見事にひっかかりましたね。まさか、こんなに応募があるなんて思いませんでした」「そうだな。わしも期待していなかったんだ。まずは、あの百億円の詐欺事件の一味からか。百億円も奪っておいてまだ金が欲しいのか」「多分、集団犯行なので、取り分が少なかったんでしょう。仲間を売る気ですね」

「あの有名な政治家の収賄の件もあるぞ」

「元秘書からです。待遇が悪かったんでしょう。原子力発電所で秘かに事故が起こった情報も送

られてきました。感染者がほとんど死亡するウイルスが日本に上陸したメールも届いています」

「それらは国家機密だろう。この国は、この国民は、なんて情報管理がゆるいんだ」

「おかげで、我々の仕事がやりやすいのです。最後は、女子高校生を殺害した犯人からです」「なんだ、その程度の犯罪か。そんな奴、ほっておけ」

「課長。これらの情報は早速、取りまとめて上司に報告しましょうか」

「そんなことより、早くこの国から逃げ出そう。さもないと俺たちの命が危ないぞ。秘密の応募は全くなかったと報告して、代わりに秘密をマスコミに売って金にしよう。さっさとこの国からおさらばだ」

「でも、応募が全然ないのも不自然じゃないですか」

「そうだな。女子高生の殺人事件でも報告しておくか」

「一億円はどうします？その犯人にやりますか」

「もったいない。犯人に盗まれたことにして、俺たちが貰おう。当座の逃亡資金だ」

翌日、俺は驚いた。ネットでは俺の事件が流されていた。女子高校生を殺害した上に、一億円を盗んだことになっている。

くそ。あの公募に応募したせいだ。でも、やはり俺の秘密が一番すごかったんだな。だけど、一億円は盗んではないぞ。全国秘密愛好会に文句を言ってやる。

だが、それよりも逃げるのが先だ。捕まるわけにはいかない。俺は自動車のアクセルを思い切り踏んだ。